

単元名:ちがうって、すてき!		
氏名:宮上 和志	学校名:神戸市立灘さくら支援学校	
担当教科:全教科	実践教科:生活単元学習(国語・音楽・図工)	
時間数:3時間	対象学年:知的部門 小学部4~6年	人数:10人
使用教材:みんなぱっく(国立民族学博物館貸出用学習キット)、チチャモラダ、インカコーラ、とうもろこし(黄・紫)		

【実施概要】

【1】単元の目標		
日本と異なる食べ物・踊り・音楽を受け入れ、共通点や相違点を見つけ、気付きを表現することができる。		
【2】単元の評価規準	(ア) 知識・技能	・日本と他国の文化(食べ物・踊り・音楽)の特徴を知ることができる。
	(イ) 思考・判断・表現	・写真や実物を見て共通点と相違点を見つけられることができる。 ・感じたことを言葉・身振り・手振り・表情で先生や友だちに伝えることができる。
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	・自分から実物に触れたり、活動に取り組んだりしようとしている。 ・日本と異なる食べ物や踊り、音楽を受け入れようとしている。
【3】単元設定の理由	<p>本校は、JICA関西の近隣に位置し、校外学習等で訪れることも多く、常設展示で海外の服や生活道具は見たたり触ったりしたことがある児童が多い。また、海外にルーツのある児童も一定数籍しているため、多様な文化的背景をもつ環境にある。このような環境の中で、本学級の児童は五感を使った活動に強い興味を持ち、積極的に試してみようとする児童が多い。「同じ」、「違う」という比較概念を理解している児童も多く、身振りや表情、言葉での表現を楽しんでいる。さらに、異文化に対する先入観が少なく、新しい体験に対して素直で好奇心旺盛な反応を見せる。また、友だちと一緒に活動することで学習意欲が高まり、協働的な学びを通じて表現や気づきを広げることができる。</p> <p>そうした児童の実態を踏まえ、食べ物・踊り・音楽という三つの文化要素を、扱う教材として選定した。これらは、児童にとって親しみやすく、体験的学習に適した教材である。具体的には、これらをハテナボックスやパズル、神経衰弱などのゲーム形式に取り入れることで、楽しみながら比較し、文化を感じられる。また、実物教材(ペルーの炭酸飲料インカコーラ、紫とうもろこしを原料としたペルーの飲料チチャモラダ、ペルー楽器等)を活用することで、抽象的な文化理解を具体化し、感覚的な学びへと促進する。このように、段階的に食→踊り→音楽と展開することで、多角的な文化理解を図ることを意図している。</p> <p>指導にあたっては、体験重視の指導を心がけ、児童の自然な反応や気づきを大切にす。正解を求めるのではなく、感じたことを自由に表現できる環境づくりを重視し、多様な表現方法を認める。加えて、ニュージーランド出身のALTとの連携により、複数の文化比較を可能にし、より豊かな国際理解を促進する。同時に、製作活動や身体表現を通じて、文化への親しみと理解を深める指導を行う。これらの活動を通して「できた」や「ちがう、なんで?」といった部分を引き出し、文化の違いを発見する楽しさを味わわせたい。</p> <p>以上のような取り組みを通じて、本単元の授業では、普段と異なるもの・ことへの抵抗感を減らすことを目指す。同時に、海外の文化に対する興味関心を現在よりも高めることを期待する。これにより、多様性を受け入れる心を育てていきたい。</p>	

本授業の実施にあたっては、教師海外研修(ペルー)で授業者が現地で得た実体験が、本授業の信頼性と臨場感を高める重要な要素となる。実際にペルーで味わった料理の味、聞いた音楽のリズム、見た伝統舞踊の美しさなど、五感で感じた生きた文化体験を児童に伝えることで、教科書的な知識を超えた深い文化理解を促進することができる。さらに、現地の人々との温かい交流体験を通じて、文化の違いを受け入れることの大切さや、異文化理解の楽しさを児童に伝える貴重な資源となる。

【4】展開計画(全3時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 本時	日本とペルーの食べ物を比べて「おなじ」と「ちがう」を見つけよう	①ペルーの紹介をきく ②ペルーハテナボックスをする ・コーラとインカコーラ ・とうもろこしと紫とうもろこし ③ごはんパズルをする 日本:おにぎり、みそしる ペルー:ロモサルタード、セビーチェ、 ④同じところ、違うところ発見神経衰弱をする ・とうもろこし ・バナナ ・コーラ ・お肉 ・じゃがいも ・楽器 ・伝統的な衣服 ・動植物 …等 ⑤チチャモラーダを紹介し、体験する ⑥振り返りをする	・大型テレビ ・パソコン ・紹介用スライド ・ハテナボックス ・コーラ ・インカコーラ ・チチャモラーダ ・とうもろこし ・食べ物パズル ・神経衰弱カード ・チチャモラーダ
2	日本とペルーの民族ダンス、衣装から「おなじ」と「ちがう」を見つけよう	①日本の伝統舞踊を知る ・ソーラン節 ・盆踊り ②盆踊りを踊る ③ペルーの伝統ダンスを知る ・マリネラ ・ワイノ ④衣装づくりをする ・カラフルなポンチョを作る ⑤伝統ダンスを踊ってみる ・ポンチョを着てワイノを踊る ⑥振り返りをする	・大型テレビ ・パソコン ・紹介用スライド ・ポンチョ(みんなパック) ・大きめのビニール袋 ・マスキングテープ ・油性ペン
3	ペルーの楽器や音楽から「おなじ」や「ちがう」を見つけよう	①音楽に合わせて伝統ダンスを踊る ②楽器の音クイズをする ・タンブリン ・チャフチャ ・雨音棒 ③いろんな楽器の音を出したり触ったりする ・ペルーの楽器 (みんなパック「アンデスの玉手箱」) ④ペルーの音楽に合わせて演奏する ⑤楽器グループとダンスグループに分かれて音を出したり踊ったりする ⑥振り返りをする	・タンブリン ・チャフチャ ・雨音棒 ・モセーニョ ・タルカ ・ケーナ ・ピンキージョ ・サンポーニャ ・グイロ ・マトラカ

【5】本時の展開			
過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (10分)	①あいさつをする ②ペルーの紹介を聞く ③ハテナボックスの中身を考える	<ul style="list-style-type: none"> サインを一緒にしながら言葉を掛け、始まりを意識するように促す。 動画の前後に「どんな国かな?」、「どうだった?」と問いかけ、ペルーへの関心を高める。 正解を急がず、児童の様々な予想を受け入れ、自然な反応を引き出す。 言葉が浮かばない児童には、思いを聞き取り適した言葉を授業者が伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> スライド ハテナボックス コーラ・インカコーラ とうもろこし(黄色)・とうもろこし(紫色)
展開 (10分)	④食べ物パズル、食べ物の紹介をする 日本:おにぎり、みそしる ペルー:ロモサルタード、セビーチェ ⑤同じところ、ちがうところ発見、神経衰弱をする(食べ物) ・とうもろこし(黄色/紫)・バナナ(黄色/緑) ・コーラ(黒/黄色)・食べるお肉(牛/クイ) ・じゃがいも(白/紫)・さつまいも(黄色/白) ⑥チチャモラーダ紹介、体験をする ⑦同じところ、ちがうところ発見、神経衰弱をする(文化的なもの) ・楽器(和太鼓/カホン)・住まい(木造/アドベ) ・衣服(着物/アンデスの民族衣装) ・踊り(盆踊り/マリネラ) ・工芸品(織物/アルパカの毛の織物)	<ul style="list-style-type: none"> 日本の食べ物から始めて、安心感をもたせる。 完成したパズルの食べ物のおいしさや材料等を紹介し、「食べてみたい」という気持ちを引き出す。 写真や名前のひらがな、マークなどの手がかりをカードにつけておくことでマッチングできるようにする。 児童の「おなじ」や「ちがう」といった発言を取り上げ、どんなところからそう思ったのか掘り下げる。 色や味、においなどの視点を紹介し、それぞれの自然な感想を受け止める。 音や動画、実物等を実際に紹介し、同じだけど違うところを感覚的に理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 食べ物パズル 紹介スライド 日本とペルー 神経衰弱カード チチャモラーダジュース
まとめ (5分)	⑧振り返りをする ⑨あいさつをする	<ul style="list-style-type: none"> 「たのしかった」、「びっくりした」の2つの視点から学習を振り返る。 気持ちを表現できるように、気持ちカードや学習内容カードが見える場所に掲示する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容カード 気持ちカード

【授業実践の様子】

①ハテナボックスで中のものを予想している様子



②神経衰弱に取り組んでいる様子



【6】本時の振り返り

今回の授業では、生活単元学習としての学習活動を通してペルーの文化や食べ物に親しみながら、日本との違いや共通点に気づくことをねらいとして活動を行った。

はじめにペルーという国について紹介すると、児童たちはその文化や食べ物の写真に注目していた。ペルーの場所を紹介する際に「ハワイはここだね」「万博でこれ(ペルー館)見た?」といった個々の経験に寄り添った声かけを行うことで、児童の生活と学びを繋げ、より主体的な関わりを引き出すことができた。続いて行った『ハテナボックス』では、コーラとインカコーラ、とうもろこしと紫とうもろこしを比べながら、「色、ちがう!」「紫!」と声をあげたり、紫のとうもろこしを見て引きつった表情を見せたり、五感で感じたことをそれぞれ表現していた。その後に取り組んだ『ごはんパズル』では、日本の食べ物としておにぎりやみそしる、ペルーの食べ物としてロモサルタードやセビーチェのパズルに取り組んだ。具材の形や色などに注目しながら組み立てることで料理を注視することができていた。『同じところ、違うところ発見神経衰弱』では、とうもろこしやバナナ、コーラ、お肉、じゃがいも、楽器、伝統的な衣服、動植物などを題材に、児童たちはカードをめくりながら「これ、色、ちがう」「ん?(なにこれ)」といった発見を楽しんでいた。しかし、カードを取ることに夢中になる児童も多く、違いに気づくという目的をより達成するためには、ゲームの前にカードの内容を確認する時間を設けるとよかったと感じた。『チチャモラダの試飲』では、「紫?」と驚いたり、コップに手を伸ばし(もっと飲みたい)たり、「いらない!」と嫌がったりするなど、児童の素直な反応が見られた。味や色、香りの違いを体験することで、よりペルーの文化に触れることができたように思う。授業の締めくくりとして振り返りの時間を設ける予定だったが、活動内容を多く盛り込んだため時間が足りず、十分に行うことができなかった点は今回の課題である。

全体を通して、児童は個々の目標を達成しつつ、ペルーの文化や授業の内容に興味関心をもっていただように感じる。

【7】単元を通じた児童生徒の反応/変化

ペルーの民族衣装を見た際には、授業者の「これ、何色?」という問いかけに「緑」、「赤」、「オレンジ」など答え、衣装の色に注目していた。別の児童は、実際に試着してみて「めっちゃ派手やな」と柄がたくさんあることや派手な色使いに気づき、授業者が「〇〇さん(児童名)似合っているよ」と伝えると「普段からこれ着るのはちょっと」と発言していた。滑らかな生地を手でスリスリ触るのが好きな児童は、衣装を着てみて生地のトゲトゲ具合や硬さが好みではなかったようですぐに脱いでいた。

ペルーの楽器を体験する際には、音を鳴らすことはもちろん、楽器の模様や柄、材料の違いに気付き、「これ(この模様)」と指さして授業者に伝えていた。雨音棒やチャフチャなど、校内にあるものもあり、授業者が「これ見たことない?」と問いかけると「うん」と頷き、音の鳴らし方を披露していた。

子どもたちにとっては未知のものが多かった授業だが、少しでもチャレンジしようとする姿が育っていった。

【単元を通し変容した児童の態度や学習意欲】

「次、いつペルー?(いつペルーの授業するの)」と期待感をもって授業に参加する児童もおり、海外に関心をもつ児童が増えたように感じる。授業後には、「みんぱく」(国立民族学博物館の貸出用学習キット)の資料セットを手でトントンとして(中のもの見たい。) 同梱されているほかの資料に興味を示したり、図書館で借りてきた国の本を開いて授業者に見せに来て、ペルーを指さして一緒に内容を見たりする場面もあった。授業で紹介したチチャモラーダを保護者と一緒に探しにいった児童もおり、学びが保護者にまで伝わっていた。単元が終わった後も、「次はどこ国?」と楽しみにしている児童も見られた。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

(授業前)

児童の多くは「外国=遠いところ」「知らないものがいっぱい」という漠然としたイメージをもっていた。ペルーという国名を聞いても「なに?」「どこ?」といった反応があり、漠然としたイメージも無い様子だった。食べ物や踊り、音楽に対しても「日本のほうがいい」といった見方もあり、異文化に対する興味は限定的だった。

(授業後)

授業を通して、児童は渋い顔をしながら「まあ、おいしいかな」とチチャモラーダの感想を言ったり、ケーナを見て「この楽器、(日本にあるものと)似てる」と言ったりして、異文化に対する見方を少しずつ変化させていた。違いにおどろきつつも、体験を通じて親しみを持つようになった。『ちがう』を受け入れる姿勢が育ち、今後の国際理解教育への土台となる変容が見られた児童もいた。

【8】自己評価

1. 苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・外国という身近ではないものにどう興味をもたせるのか。 ・興味関心を引き出すためにどのようなテーマ、教材を使用すればよいのか。 ・どのように児童の興味を引きつつ、教科としてのねらいをもって国際理解の視点を取り入れるのか。 ・『ちがう=おもしろい』ということ伝えるためには、実際に体験するということが一番であるが、輸入することの制限や飲食に関する制限、情報端末間での写真動画移動の制限など、どうクリアすればよいのか。 ・児童は授業者の反応をモデルとして繰り返すことが多く、どうやって素直な反応を引き出すのか。
2. 改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・授業者からの知識の伝達では、『ちがう=おもしろい』とは感じにくい。五感で感じることでできる違いをもっと授業の中で取り入れ、体験の中で気付くことのできる面白さをもっと広げればよかった。

	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しがもてないと不安な児童も多いため、「ハテナボックスには野菜がはいっているよ?」と安心して活動に参加できるための手立てが必要であった。 ・違いに注目させることに重点を置く場合は、神経衰弱の前にカードを紹介して、違いに気付かせる必要があった。紹介することで落ち着いてカードを確認できたと思われる。
3. 成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の授業を通して、児童が図書室で外国についての本を見たり、iPadでネットを見ている中で指さしたり「これ(これどこ?)」と、外国のことに興味をもつ姿が増えたことが一番の成果である。 ・他クラスの授業者へ「ペルーってしてる?」と自慢げに話す姿があり、今回の学習が児童らの興味関心を広げる扉になった。 ・支援学校での国際理解の視点を取り入れた本授業を公開授業とすることで、本校に通っている児童について知ってもらい、地域の理解者を増やしていく一助となるとともに、支援を要する児童に対する国際理解の授業の1つのモデルを示すことができた。
4. 備考	<ul style="list-style-type: none"> ・授業案の事前検討の際に「単なる知識を得るだけでは意味がない。心と感覚が大事。違いを異として受け止めてしまうのが現代の問題点。そこをこの単元で指導できるのは大変意義がある。」と助言いただいた。今回、授業者が実際に体験し、ワクワクし、面白いと感じた経験をもとにしたからこそ伝えられた部分も大きい。特に日本人にとって「違うこと、は不安なこと、である。だが、授業者が違いを楽しめたからこそ児童の表情も和らいだり、笑顔になったり、自分から手を伸ばして授業に参加できたように感じる。今回このようなペルーでの機会は大変意味のある体験であった。 ・「日本人・外国人」「国際理解教育・特別支援教育」など、言葉によるラベリングは、教育的な意図を明確にする一方で、そこに無意識の隔たりや境界を生むこともある。特にSNSの普及により、ラベリングはより細かく、瞬時に広がるようになった。その良さもあるが、同時に、安易な区別やステレオタイプ形成、政治的な排外的操作につながる危険性も孕んでいる。それらの言葉の解像度を上げ、より多面的で柔軟な視点をもって人や文化を捉える力を育てることが、今後必要ではないだろうか。 ・8月に参加した「第22回多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー」の基調講演において、ロニー・アレキサンダー教授が「多文化共生はマジョリティー側の視点である」と述べていた。つまり、「共に生きる」と言いながらも、どこかで“受け入れてあげる”という構造が含まれている場合がある。このような構造では、真の共生とは言えない。本当の共生とは、すべての文化や立場が対等に尊重され、互いに認め合いながら共に社会をつくっていくことを意味する。その意味で違いを前提にしたかわりが日常的に行われている場である特別支援学校は個々の存在を尊重しあう実践が根付いている。ぜひ、他校種の方々にも関心を持っていただけたらと思う。

添付資料:

○みんぱっく(国立民族学博物館の貸出用学習キット)でを使用した教材



男子日常着のポンチョ



ティンタ村の女子祭礼用衣装



ティンタ村の男子祭礼用衣装



女子日常着のスカート



女子日常着のマンタ



男子日常着の帽子



女子日常着の帽子



コカ袋



楽器 マトカラ



楽器 雨音棒



楽器 ケーナ



楽器 サンポーニャ



楽器 チャフチャ



○チチャモラーダ



○インカコーラ



○紫とうもろこし